



すべての男は消耗品である。VOLUME 6

村上 龍

すべての男は消耗品である。Vol.6

2001年4月20日 初版第1刷発行

著者 | 村上 龍 ©Ryu Murakami 2001, Printed in Japan

発行者 | 栗原幹夫

発行所 | KKベストセラーズ 〒170-8457 東京都豊島区南大塚2-29-7

電話03-5976-9121(代) 振替00180-6-103083

<http://www.kk-best sellers.com/>

印刷 | 近代美術

製本 | ナショナル製本

電植製版 | 三協美術

ISBN4-584-18029-6 C0095

定価はカバーに表示してあります。乱丁、落丁本がございましたらお取替え致します。

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製複写（コピーする）ことは、
法律で認められた場合を除き、著作権および出版権の侵害になりますので、
その場合はあらかじめ小社あてに許諾を求めてください。

1380円

10/1/1998 1:16AM

010

せることもある

10/28/1998 3:12AM

018

い充実感がある

12/1/1998 7:12PM

026

12/24/1998 6:42PM

034

1/26/1999 5:49PM

042

2/28/1999 10:44PM

050

3/29/1999 4:33PM

058

4/23/1999 6:43PM

066

5/24/1999 2:04AM

074

を使っていない

6/30/1999 4:18PM

082

7/27/1999 7:22AM

090

8/30/1999 6:27AM

098

9/28/1999 3:24PM

106

10/25/1999 2:29AM

114

嘘は悪質だ

11/30/1999 2:47PM

122

12/21/1999 1:44AM

130

1/31/2000 3:09AM

138

ばいいか

2/28/2000 2:54AM

146

4/1/2000 11:35PM

154

4/30/2000 3:45AM

162

だろうか

6/1/2000 1:08AM

170

6/29/2000 1:55AM

178

8/1/2000 7:56AM

186

問

9/2/2000 2:00AM

194

がない

9/25/2000 2:35AM

202

11/4/2000 2:46AM

210

に崩れている

12/2/2000 1:35AM

218

12/28/2000 0:22AM

226

1/31/2001 7:15PM

234

3/2/2001 6:57PM

242

夢日記は小説に役立つが、旅行日記はどうなのだろう？

何かを知るということは、何を知らないかをはっきりさ

小説や映画はやっかいだ。ものすごく大変で、ものすご

文句があるんだったら、ミック・ジャガーに直接言え

経済は人間の精神に影響し文化となってしまう

誰も競争社会というものをイメージできていない

戦争には莫大な金がかかる

わたしは労働者のことを心配しているわけではない

小説家は変化を記録する

わたしたちはものすごい量の金を持っているのに、それ

「きっかけは別にありません」

日本人は「満州国人」になりたくなかった

今の日本に希望がないのならばそれはきっと不要なのだ

現在の日本に没落のリスクはないと言い切る人はバカだ

誠心誠意頑張ればコミュニケーションが成立するという

信頼できない人間が自分の傍にいないという安堵感

無知がバブルを生む

自分の娘が援助交際をしているのがわかったらどうすれ

ルーブル美術館で、厚底のブーツの日本人の女が転んだ

わたしたちは身近に敵がいるという事態に慣れていない

「日本的なシステム」というようなカテゴライズは有効

なぜホームレスを襲ってはいけないのか

「音楽の国」にはストリートミュージシャンがいない

「21世紀に日本人はどう生きればいいのか」という愚

デビュー以来、苦勞しましたというコメントをしたこと

日本を脱出する若者が増え続けるのは当然のことだ

子どもは学校に行くのが当たり前だ、という常識はすで

現在「世間」はどこを探しても存在しない

「ライフスタイル」は趣味ではなく職業で決定される

フリーターには未来がない



3 / 1 / 2001 4 : 40 PM



すべての男は消耗品である。Vol.6

夢日記は

小説に役立つが、

旅行日記は

どうなのだろう？

10 / 1 / 1998 1:16AM

イタリアに行っていました。ペルージャという町で、中田選手とかなりの時間を一緒に過ごした。時差でボーっとした頭でこれを書いている。

中田は現地の日本メディアに悩まされていた。話を聞いたが両者の溝は深い。日本メディアの側からの話は聞いていない。だが両者は別に喧嘩をしているわけではないので、双方から話を聞かなくても、コンフリクションの原因は想像がつく。

日本を支えてきたあらゆるシステムが「金属疲労」を来している現在、メディアもその例外ではない。メディアも変わらなければいけないのだが、まったくその兆しはない。

八五年のプラザ合意以来、円高が容認されるようになったわけだが、その際、日本の製造業はドル建ての輸出価格を上げようとしなかった。二四〇円から二〇〇円に、さらに一七〇円から一〇〇円に円が高くなっていたとき、その都度、額面通りドル建ての輸出価格を上げ、輸入価格を下げていれば、為替レートは一七〇円あたりで落ち着いていたという説もある。

だが日本企業はドル建ての輸出価格を上げようとしなかった。コスト割れをしてもいいから売りまくれ、というような戦略だったという。なぜか？

日本のトップ企業は円高について、他社を潰すチャンスだと考えていたのだ。これで下位メーカーに勝てると考えて、低価格競争に入ってしまった。つまり日本企

夢日記は小説に役立つが、
旅行日記はどうなのだろう？

業のライバルは同じ日本企業だったわけである。

こういった構図はたとえば福岡のデパート競合などにも見ることができる。福岡の中心地である天神では一昨年あたりから大型百貨店の進出が相次いだ。わたしは何度かそのあたりのデパートに入ったことがあるが、ものすごい売り場面積と品揃えで、いったい誰がこれだけの商品を買うのだろうかと不思議に思ったものだ。そして今、天神の百貨店街では共倒れの噂が流れている。

共倒れは予想できたはずなのに、どうして各百貨店はそれでも大型デパートを造ったのだろうか。それは、他がやるのにうちが黙ってみているわけにはいかないという日本的な心情からだと思う。共倒れの危険性はわかっていても、もし他が成功した場合には、メンツも潰れるということなのだろう。

六〇年代から七〇年代にかけて邦銀が外国に進出したときも、他がやるならうちもというような発想だったと聞いている。

ではそのような国内での競合とゼネコンに代表される談合はどう結びつくのだろうか。

答は簡単だ。邦銀も百貨店も建設業界も世界を視野に入れたビジネス戦略など持っていない。ライバルはあくまで国内の他社なのだ。したがって、他社にたとえ勝てなくても、負けることは許されない。そこで共倒れ覚悟の過剰競合や負けを回避

するための談合が行われることになる。

そういった体質は企業だけにとどまらない。メディアも同じだ。『週刊ポスト』のライバルは『週刊現代』であり、『朝日』は『読売』、フジテレビのライバルは日本テレビでありTBSでありテレビ朝日である。ライバル同士は日本の文脈内で競争するが、その競争そのものが自分たちの利益に明らかに反する場合は談合というやり方になる。

中田を巡るイタリア現地の日本メディアも同じだ。

彼らが送る記事は日本人だけに向けられたものだ。彼らのライバルは日本国内の他誌・他紙であり、当たり前のことだがよその国のスポーツ紙ではない。だから彼らは他紙を抜こうとするし、抜かれることが何よりも恐いので、抜かれるよりは談合を選ぶ。同じような記事や写真を載せるのである。

中田は日本の文脈を飛び出してしまった選手だ。彼はセリエAという世界最高峰のサッカーリーグにごく普通に受け入れられた。そういうことはこれまでほとんどなかった。

海外で活躍する日本人は、移民がそうだったように、必ず苦闘しなくてはいいなかった。習慣・生活が違う外地で日々苦闘し悩み、手にする名誉は日本の肉親や世間に捧げる、それが海外で活躍する日本人のわかりやすい姿だった。それを逸脱す

夢日記は小説に役立つが、
旅行日記はどうなのだろう？

る人間を紹介する言葉を日本のメディアはまだ持っていない。

だから、中田をどのような方法で取材すべきかというマニュアルのようなものはない。中田が提出するルールを守る、くらいしか解決策はないだろう。

□

今年から旅行日記を書き始めた。

正確に言うとう今年の二月に行ったキューバから、これといって明確な考えがあったわけではなく、『龍声感冒』というわたしのファンが作るインターネットサイトの掲示板運営委員へのサービスとして書き始めたものだ。そう言えば夢日記も三年前から書いている。

夢の日記は小説に直接役立つが、旅行日記はどうなのだろう？

今回イタリアへ行つて、初めてのイタリア旅行のことを思い出した。今から十二年前にテニスのフレンチオープンとウィンブルドンの間、イタリアに初めて行ったのだった。ミラノとフィレンツェとローマの三都市だった。しかし、ミラノからフィレンツェへどうやって行ったのか憶えていない。レンタカーのような気もするし、飛行機か列車だったようなおぼろげな記憶もある。

小説を書くときの言葉の選び方も変わってきた。二十代の頃は弾けるように言葉